【第三種郵便物認可】

SUNDAY NIKKEI

エコノミストたちの栄光と挫折

竹内 宏著

戦後経済史と自らの軌跡振り返る

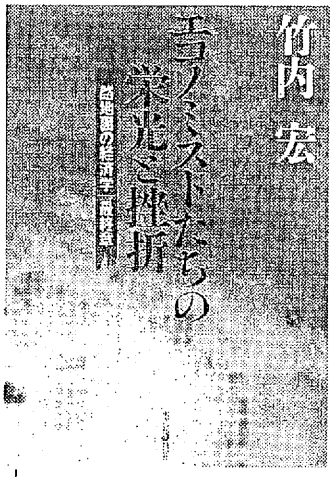
私の人生は長銀調査部そのものだった――そう語る著者の言葉に偽りはない。入行後の研修を経て最初に配属されたのは花形の融資部門、しかし二年後には同期で最低の勤務評定を受け「調査部に追いやられた」。銀行マンとしては不幸な異動でも、著者にとっては「幸せを呼んだ…調査部」だった。

エコノミストになりたくて、官庁や大企業に就職する人はほとんどいない、「人事異動によって調査部門に転勤し、…やむなくエコノミストになった人が大部分だ」と著者はいう。評者も銀行勤務時代、調査部へ異動した際に先輩から「何か悪いことでもしたのか」とただされた記憶がある。敗戦直後の経済安定本部を除けば、日本の組織におけるエコノミストは「傍流」なのである。

しかし、傍流には主流を歩むエリートには摑めないチャンスが潜んでいる。心機一転、経済調査の醍醐味に惹かれて分厚いリポートを書き上げ、それが周囲の環境と時の運に恵まれ社会の注目を浴びれば、たかがエコノミストは突然されどエコノミストとして開花する。『路地裏の経済学』で一世を風靡し、調査部長の職で長銀の専務まで上り詰めた著者こそ、幸運な夢を実現したエコノミストだ。そんな著者が戦後日本経済の歴史を独特の視点で振り返りながら、自らのエコノミストとしての軌跡を著したのが本書である。

経済だけではなく人や組織も多くの条件がそろわなければ成功は難しいが、たった一つの条件を欠くだけで失敗してしまう。その典型が積年の研鑽によって長銀エコノミストたちがようやくたどり着いた栄光と、その幕を引いた長銀経営陣による深慮を欠いた判断ミスの顚末ではないか。それでも著者をはじめとする往年のエコノミストは、栄光を知らずに去った若いエコノミストより幸せだったと思う。

長銀の破綻から十年、シンクタンクを舞台にエコノミストたちが活躍できる時代がやってきたと、著者が本書で送るエールは決して往年のノスタルジーではない。若い人たちにエコノミストの栄光を目指し、もう一度挑戦して欲しいという心からの願いなのである。



（東洋経済新報社・二、〇〇〇円）

▼たけうち・ひろし　30年生まれ。東大卒。日本長期信用銀行専務、長銀総合研究所理事長などを経て竹内経済工房を主宰。「路地裏の経済学」シリーズで著名。

《評》立命館大学教授　高橋　伸彰